



選考委員特別賞  
最相葉月賞

母

柴田 遥菜

消毒液の匂い。バタバタと忙しそうに走る足音。幼い私はガラス越しの生まれたばかりの赤ん坊を見つめて背のびする。

窓から見える空はもう暗くなっていて、一人で立っている私は少しだけ不安になる。

「ごめんね、また遅くなった。」  
振り返るとそこに母がいて、私は顔を見上げて手をつなぐ。

私の母は産婦人科の病院に勤める看護師だ。小学校に上がる前までは、仕事に追われて帰りが遅くなるという

母を、勤め先の病院の新生児室の前で待っていた。すやすやと眠る赤ん坊を見ていると、時間なんてあっという間に過ぎて、夜はすぐにやってきた。

白衣で働く母はすごくかっこよくて、幼い私にとってどんな絵本に出てくる主人公よりも強く頼りになる私のヒーローだった。そして、私と弟を女手一つで育てる母子家庭の我が家の大黒柱でもある。

そんな忙しい母だったけれど、休みの日にはいつもどこかへ連れていってくれたり、私の行事があれば必ず来てくれたりと、今思えば本当に母が休めていたのは寝ているときだけではないかと思うほどだった。

小学校へ上がる前の私はなんとなくだけれど、母は私のためを思って一生懸命働いてくれていると分かり始めてきた。母の仕事が長引いて保育園への迎えが遅くなって、突然の夜勤で、夜母がいなくても、はつきり「さみしい」と口に出すことが出来なかった。私がその言葉を口にすれば、母を困らせてしまうと思っていたから。

ある時短い間だが、私は母と会うことが出来なくなつた。母が入院したのだ。まだ小さかった私は面会する事が出来ずに、ただ入院先の病院の駐車場にいるしかなかった。

「今日もお母さん会えんって。帰ろう。」

大好きな祖父が少しさみしそうに私を見つめ、声をかける。そんな言葉に私はただ頷くしか出来ない。祖父の困つたような顔を見ると、何も言えなくなってしまうのだった。私のさみしい気持ちなんて、私が我慢すれば済むんだ、と。

母への面会は出来なかったが、母からの手紙はときどきもらえた。まだ小学校へ上がる前の私のために、全てひらがなの短いメッセージと手書きのキャラクター達。

手紙はすごいうれしかったけれど、祖父の顔を思い浮かべるとモヤモヤした。その時私が初めて感じたモヤモヤは、今なら何だったのかハッキリ言える。無力感だ。

人を困らせてはいけない、そう思っていたから我慢してなるべく困らせないようにしていたのに、入院している

母に逆に励まされ、祖父は私を見て、悲しそうな顔をずる。私では何も出来ないんだ。そう思った。

小学生にもなっていない子供が、考えすぎだつたと思う。つまらなくて、子供らしくない子だったかもしれない。今ではあまり思い出したくない記憶だ。

母はもう退院して、元気にまた働いている。働く母は生き生きしていて、母から聞く話からも母のやりがいを感じることが出来る。

二人で買い物に行くときよく、母が担当した患者さんに話しかけられる。母はとてうれしそうで、楽しそうに、働いてすごいと私はいつも思う。

母はいつか、

「看護師さんってどんな仕事するん？」

と尋ねた私に、

「色んな人を少しでも元気にして笑顔になつてもらえるようにする仕事よ。」

そう答えた。この答えが、母が長い間看護師という仕事を続ける理由だと私は思う。

この質問をする前に、私は母が一人で夜に泣いているのを見た。夜中ふと目が覚めると泣き声がして、こっそり見ると母が背中を向けて泣いていた。すぐに寝入ってしまったからなんで泣いていたのか分からなかったけど、私は看護師になって、母を笑顔にしたいと思った。安易な理由で私の夢は看護師になった。

中学三年生となった今でも夢は変わっていないけれど、理由は少しだけ変わった。母を笑顔にしたいということから、一人でも多くの人を笑顔にしたいということに。十年近く、私はずっと

「将来は（大きくなったら）何になりたい？」という質問に

「看護師！」

と答え続けている。

今でも、母の白衣姿を見るとかっこいいなと思う。看護師として働く母は、私にとって一番大きな存在だ。幼い頃から見てきたその姿はいつの間にかこんなにも大きな憧れへと変わった。私もいつか母と同じ白衣を着てた

くさんの人を笑顔にするのだ。

小学四年生のとき、看護師になりたいと言った私に母は、自分が看護師になった理由を話してくれた。

母にはいとこが全部で四人いる。しかし私は三人のいとこにしか会ったことがない。一人のいとこは私が生まれる前に亡くなったからだ。それは母もまだ高校生の頃、母のいとこは看護師として地元から離れて働いていた。そこで起こったのが阪神淡路大震災だった。混雑した情報の中で連絡が取れず、母を含め親族は皆、安心出来なかったそうだ。いとこが亡くなったと知った母は、そのいとこの思いを受け継ぐために看護師になろうと決意した。

この理由をきいたとき、少しだけ母への見方が変わった気がした。私にとって、一番尊敬出来る母がこんな風になろうと目指した母のいとこという存在。いくら母でもやっぱり憧れるような存在はあるんだと思った。言い方が変だったかもしれないが、いつも仕事も家事もやりこなし、弱い部分を見せずとにかく強く見える母も、そ

のいとこの話には少しだけ声がうわずった。

母は本当に強い人だ。私の父親は亡くなっていて、母子家庭という環境でこの十五年間、母親と父親という二つの役割を持った母は、私に父親らしく背を向けて前を歩き、ときどき後ろを振り返って手を支しのべて育ててくれた。

私の毎日のお弁当はどんなに忙しくてもなるべく手作りを持たせ、朝は「いってらっしゃい」の言葉をかかさ  
ない。

「子供は遠慮なんかせんでいい。」

そう言ってご飯はたくさん食べさせようとするし、

「子供にひもじい思いなんてさせちゃいけない。食べ物に恵まれとる今は幸せなんよ。」

と言う。この言葉は母の祖母、私の曾祖母の受け売りらしい。

本当は、母はシングルマザーだということを気にしていると思う。一度だけ、

「お母さんだけでごめんね。」

と謝られたことがある。

その時は声も出せず、顔も見れなかった。あまりにも突然の母の弱音に、泣きそうになってしまったからだ。

いつも明るく接してくれる母だけど、逆に罪悪感を感じた。絶対に母の方がつらいことが多かったはずなのに。

私は今まで母がしてくれてくれたことに不満は何一つない。むしろ感謝している。

中学三年生の今、なんとなく、母と口をききたくなくなったり、反抗的に言い返してしまっただけになったりすることがある。母のことが嫌な訳でもなく、そんな態度をとってしまう自分に腹が立つ。母に恩をあたで返すことではいけない。ムカムカした思いは、夜まで消えなくて、なかなか眠れない。反抗期という、誰もが通る道だと言われても、私は母に思い切り「反抗」というものが出ない。

母の仕事が終わるまで職場で待った後は、いつも自動販売機のいちごみるくを買ってもらった。眠れない夜にずっと横にいてくれた。誕生日には休みをとって学校か

ら帰れば必ず「おかえり」と言ってくれた。いつも家  
 いない母が家にいるその新鮮さと、「おかえり」という  
 慣れない言葉が照れくさかった。

挙げていけばキリがないほどの母がしてくれたこと。

反抗なんてしてられないほど、私は母に感謝しな  
 ければならない。

ときどき思う。過去に戻ることが出来たら良いの  
 と。昔なら母に素直にありがとうと伝えられていたの  
 に。

今は少し言いつらいけれど、どんなときでもこの十五  
 年間、たくさんの壁を一緒に乗り越えてくれた母に感謝  
 している。言葉では言い表せないほどだ。たとえ幼い  
 頃、母と長い時間過ごすことはなくても、一緒にいな  
 くても、母からの愛、そして父親としての思いも私には強  
 く伝わった。

愛情と共に、私に夢も与えてくれた母。

幼い頃見た母の働く姿、そして今見る母の姿。ヒー  
 ローみたいに見えた昔と、憧れの職業を生き生きとこな

す一人の看護師として見る今。

いつの間にか私も大きく成長していた。保育園の卒園  
 式で母がすごくうれしそうに写真を撮っていたのが、つ  
 いさっきのように鮮明に思い出せるのに、今ではもう小  
 学校も卒業し、中学校も卒業まであと少し。

周りの同年代の子より小さめで心配されていたほど  
 だったが今では母と視線は変わらない。見上げる必  
 要もないほどだ。

今なら分かる。母は決してヒーローではなかった。母  
 親と子供という不利に捉えられる状況の中、必死に守っ  
 てくれていた。自分の中の許容量を超えて入院してしま  
 うほど、たくさんものを背負ってくれた。

次は私の番だ。憧れの職業、母と同じ職業に就いて、  
 今まで母がしてくれた以上のことを恩返ししていく。私  
 は胸を張って言える。私の母は自慢の母。一番の「お母  
 さん」。